2023年（令和5年）
12月号（No. 943）
公益社団法人
日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価1部　150円
会員の会報購読料は年会費に含まれています
URL●http://www.jac.or.jp
e-mail●jac-room@jac.or.jp

令和5年度年次晩餐会を開催
展示会や図書交換会も復活

12月2日、東京・新宿の京王プラザホテルにて、令和5年度の年次晩餐会が開催された。昨年度は実施を見送った展示会や図書交換会も再開され、例年どおりの晩餐会がようやく戻ってきた感があった。記念講演会では、本会と縁の深いヒンズー・クシュの最高峰ティリチ・ミール北壁初登攀の報告などがなされた。

■橋本新会長挨拶
「さらなる発展を目指して」

日本全国の名山の名が付けられた44のテーブルに、全国から集まった335名の会員およびその同伴者が着席すると開会となった。

冒頭、今年6月に就任した橋本しをり新会長より次のような挨拶があった。

「日本山岳会は2025年に120周年を迎える。長い歴史の中で、国内外の山岳における初登頂や初登攀は枚挙にいとまがなく、ほかにも登山の振興、山岳文化の継承、自然環境の保全、国際交流など多岐にわたる活動を行なってきた」

「しかし一方で、長い歴史を有するがゆえの課題もある。高齢者が安心・安全な登山を行なうための問題点の解決、若い世代へのSNSなどを通じた情報発信、SDGsに代表される環境問題など、取り組むべきテーマは多い。また、山岳会の女性会員は全体の2割に過ぎず、多様化の観点から女性会員や女性指導者の育成も急務だと思っている」

「山岳会をさらに発展させるため、『みんなの日本山岳会』をキーワードとして、『会員の高齢化・減少の克服』『登山者の多様化への対応』『山岳環境の保全の推進』『日本山岳会の役割の再定義』という4つの目標を掲げた。大風呂敷ではあるが、10年後の会員倍増を目指していきたい」

鏡開きに登壇した原山教授（右から3人目）と歴代会長

■物故会員は74名

続いて、この1年間に亡くなった74名の物故会員に黙祷を捧げた。会場では3名の方のお名前と経歴を紹介した。小倉董子（のぶこ）さんは早稲田大学山岳部出身で、初めての女子部員。赤道アフリカ遠征隊、ニュージーランド親善登山など海外でも活躍した。石原國利さんは岩稜会で屏風岩の初登攀をはじめ、穂高岳周辺の岩場で数々の記録を残し、同会の山行中に起きたナイロンザイル切断事故の原因究明にも心血を注いだ。山岳写真家の岩

目　次

令和5年度年次晩餐会を開催
展示会や図書交換会も復活 ……1
今年もフランス・ブリアンソンで
ピオレドール授賞式を開催 ……4
北海道山岳のパイオニアでもあった
山岳修行僧円空 ……5
山の名著再読 ……8
連載■ご当地アルプス登山案内
47嘉穂アルプス ……10
48観海アルプス ……11
東西南北 ……13
活動報告　山行委員会 ……14
図書紹介 ……16
新入会員 ……16
会務報告 ……18
ルーム日誌 ……18
会員異動 ……19
INFORMATION ……19
編集後記……19

▶日本山岳会事務（含図書室）取扱時間
月～金 …… 10～20時
第1、第3、第5土曜日 …… 10～18時
第2、第4土曜日 …… 閉室

新入会員を代表して挨拶する萩原侑紀君

橋崇至さんは日本山岳写真集団に参画し力強い作品群を発表、その代表も務めた。

■新永年会員は18名

令和5年度の新永年会員は18名。そのうち5名が晩餐会に出席し、壇上で永年会員バッジを授与された。代表して挨拶に立ったのは、髙橋（今井）通子会員。「日本山岳会は、日本博物学同志会のメンバーが創立会員であるため、その始まりから学術に力を入れてきた。そんな山岳会は国内外を見てもほとんど例がない。そうした歴史ある会の永年会員になれたのは誇らしく思う」と語った。

■新入会員は正会員が198名 準会員が74名

この1年で正会員198名、準会員74名、合計272名を新入会員として迎えた。晩餐会には22名が出席。代表して挨拶したのは、中学1年生の萩原侑紀会員。「観光で行った立山の景色が忘れられず、山について調べているうちにハマってしまった。本や雑誌を通じて冬山やヒマラヤにも興味を持ったが、『独りじゃ無理かな』と思っていた。ボルダリング・ジムの横に日本山岳会東海支部があり、入会させてもらえて嬉しかった。将来はアルパインやビッグウォールに登り、海外の大きな山に美しいラインを描きたい」と抱負を語ってくれた。

■秩父宮記念山岳賞は信大名誉教授の原山智氏が受賞

令和5年度の秩父宮記念山岳賞は、北アルプスの形成に関する地質学的研究や山岳関係者への教育普及活動に長年携わってきた、信州大学名誉教授の原山智氏が受賞した。受賞の挨拶で原山氏は、山岳研究の様々な分野での深刻な課題として「後継者不足」を挙げ、「長い期間をかけて行なう山岳調査は、論文生産性が低くなりがちで、現在の評価制度では若い研究者が取り組みにくい分野になっている。現状に風穴を開け、若い研究者が山岳フィールドに出ていきやすい環境づくりのため、ぜひ皆さんのお力やお知恵をお借りしたい」と語った。

秩父宮記念山岳賞を受賞した原山教授（右）と橋本会長

■乾杯の発声は古野淳前会長 天皇陛下のお言葉の紹介も

数年ぶりの鏡開きは、橋本会長のほか古野淳、小林政志、森武昭、尾上昇ら歴代の会長経験者と原山氏の6名で行なった。お酒は、15代会長・故今西壽雄名誉会員ゆかりの「四海王」。これまで奥様の今西芳子さんのご好意でご提供をいただいてきたが、芳子さんも本年お亡くなりになられたと言う。

古野前会長の発声で乾杯をした後は、テーブルごとに会員同士の交歓を行ない、料理とお酒を堪能した。歓談中には、前日に宮内庁から電話にて伝えられた天皇陛下のお言葉も披露された。「晩餐会に出席できず残念です。講演会などがあれば、ぜひまた参加したい」とのことで、陛下が本会のことを気にしてくださっていることをありがたく感じた。会の終わりには33支部の紹介があり、盛況のうちに閉会となった。

■展示会や講演会も開催

晩餐会に先立って展示会、図書交換会、講演会が実施された。展示会は2つのテーマで構成。一つは「写真で振り返る日本人のエベレスト展」で、1970年の日本山岳会隊による日本人初登頂に始まる「日本人とエベレスト」の関わりの歴史を写真と文章で年代順に紹介。また、アルパインスケッチク

ラブ主催の「絵筆に浮かぶ山々」では、山を描いた淡彩スケッチや油絵など二十数点が展示されていた。

【記念講演会】

特別講演「ティリチ・ミール北壁初登攀　ベールに隠された標高差2000mの北壁に向かう」平出和也会員、中島健郎会員

ヒンズー・クシュの最高峰、ティリチ・ミール（7708m）は、1971年に日本山岳会石川支部隊が南西壁から初登攀（通算第5登）するなど、日本山岳会と縁の深い山である。その北面には標高差2000mを超える北壁がそびえ立っているが、周囲を6000m峰がまるで要塞のように取り囲んでいるため、全容が明らかになっておらず、未踏のまま残されていた。

ティリチ・ミール北壁初登攀の報告をする平出・中島両会員

平出和也会員と中島健郎会員は初め、山の北側を流れる下部ティリチ氷河からのアプローチを試みるが、途中のアイスフォールの状態が悪く、このルートを断念。プランBとして、上部ティリチ氷河の途中から6200mのコルを越えて北面に入るルートを偵察し、可能性を見出す。北壁取付のC2（5500m）から登攀を開始し、C3（6150m）、C4（6750m）、C5（7200m）とルートを延ばし、プッシュ6日目で無風快晴の絶好のコンディションの下、その頂上に立った。報告の最後には、次の目標としてカラコルムのK2西壁に挑戦することを表明。会場からは期待を込めた大きな拍手が送られた。

創立120周年記念事業「グレート・ヒマラヤ・トラバース」報告

「カンチェンジュンガ山群からアンナプルナ山群までの、遥かなる歩み」重廣恒夫会員、吉井修会員、飯田邦幸会員

「グレート・ヒマラヤ・トラバース」は、ネパールのカンチェンジュンガからパキスタンのK2までの約5000kmを踏査するプロジェクト。4回目となる23年秋隊は、春の終了点であるシャブルベシからガネッシュ山群～マナスル山群～アンナプルナ山群を経てジョムソンまでを踏査した。

報告ではまず、プロジェクト・リーダーの重廣恒夫会員が1～3回目、そして今回の踏査を駆け足で振り返った。その後、踏査に参加した吉井修会員、飯田邦幸会員より、参加した動機やヒマラヤ山中を踏査した感想が語られた。2人が口をそろえて語ったのは、ぜひほかの会員にも参加してほしい、ということだった。

秩父宮記念山岳賞受賞記念講演

「北アルプス（飛騨山脈）の形成」

原山智氏（信州大学名誉教授）

原山氏はこれまで地質図幅調査に取り組み、「上高地」「槍ヶ岳」「立山」「乗鞍岳」などの地質図幅の編纂を行なってきた。その過程でいくつかの大きな発見があった。その一つが「上高地」図幅の調査で見つかった、193～109万年前の滝谷花崗岩である。これまで世界で最も若い花崗岩はソロモン諸島イナムム岩体の256万年前のものが最新だったが、200万年前より若い花崗岩は急激な隆起の場で露出したのではないかと考えられた。

また、「立山」図幅の取りまとめ中には、爺ヶ岳や白沢天狗岳一帯に分布する火山岩がカルデラ火山の産物で、しかもほぼ垂直の火山岩層から構成されていることが分かった。さらに、黒部川に至る範囲に広く露出する黒部川花崗岩が、カルデラ火山の地下のマグマ溜まりが固まった、非常に若い花崗岩であることに気づいた。

滝谷花崗岩で長年悩んだ経験を踏まえ、爺ヶ岳・白沢天狗岳カルデラは、220～80万年前の年代を示す黒部川花崗岩とともに北アルプスの激しい隆起によって水平軸回転（傾動）を行なったと考察。「若い花崗岩とカルデラ火山岩のセットの発見によって、北アルプス（飛騨山脈）は100万年前後に生じた激しい回転を伴う隆起で形成されたことが明らかになった」と語った。

（文：谷山宏典、写真：奥田有恒）

REPORT

今年もフランス・ブリアンソンでピオレドール授賞式を開催

国際委員会委員長　和田　薫

11月14～16日、フランス南東部の山岳都市ブリアンソンで、今年もピオレドール授賞式が行なわれた。今年は3つの登攀賞と特別賞が1つ、それから米国のジョージ・ロウに生涯功労賞が贈られた。今回は、文字数の関係で2点を取り上げて記したい。

一つ目は、英国のポール・ラムゼンとティム・ミラーが登ったジュガール・スパイヤー（6563m）北壁。ジュガール・ヒマールは、カトマンズから最も近い高い山だが、ラムゼンは衛星写真でこの北壁を見つけ出し、登攀計画をコロナ禍前から温めてきた。今回史上最多の5回目のピオレドールを2回り以上年下のパートナー、ティム・ミラーと受賞したラムゼンは、「2003年に初めてミック・ファウラーと受賞したときは、ミックが僕のメンターだった。今回は、「ティム（・ミラー）のメンターとして一緒に登れてうれしい」と喜びを語った。

左からポール・ラムゼン、ティム・ミラー、生涯功労賞を受賞したジョージ・ロウ（撮影：Piotr Drozdz）

「ヴィア・セドナ」のメンバー。左からナディア・ロジョ、カロ・ノース、キャプシーン・コトー（撮影：Piotr Drozdz）

もう一点は、特別賞を受賞した各国のクライマー、ヨットクルーらから成る女性8名のチームである。フランスをヨットで出発、6週間かけてグリーンランドに到達後、ビッグウォールで初登攀ルートを開拓し、4週間のヨット航海を経てフランスに帰国した、名付けて「ヴィア・セドナ」というプロジェクトだ。

ヴィア・セドナは、高い冒険性と自給自足型の環境負荷を最小限に抑えた遠征、かつ国際的な女性チームということで、世界中から注目されていた。

今年のテーマは、「女性」とも言えるだろう。ピオレドールの運営側は今回、「今後なんらかの形で女性のアルピニズムをプロモートすることを決定した」と発表した。詳細については触れていなかったが、「ピオレドール女性賞」を創るということだと推測される。

ピオレドール女性賞は、以前から議論されてきた。昨今の世論の影響に加え、過去に谷口けい氏を含め2名の女性しか受賞していないことが背景にある。しかしながら、この案には反対の意見も多い。2021年に特別賞を受賞したシルヴィア・ヴィダルは、（ピオレドール女性版という案について）「そのような分け方は女性を過小評価することになると思う」と発言していた。

グリット&ロック（G&R）という女性クライマーを支援したり、初登攀を表彰するファンドを7年前に立ち上げたマーシャ・ゴードンも、「賞を創るほどには、女性クライマーの遠征はまだ数が少ない」と懐疑的な一人だ。だが、ヴィア・セドナのメンバーのカロ・ノースもG&Rで育った一人。ノースは自身のインスタグラムに「今回の私たちの特別賞受賞が、より多くの女性が大きな遠征に出かけることを後押しすることになれば、私たちは（登山や遠征についての）ジェンダー差について話題にする必要さえない、（男女）平等にたどり着けるはず」と投稿した。

これからも議論は続くだろうが、今回の授賞式では、年齢や性別に関係なく未踏のルートやより困難な登攀に意欲を燃やすクライマーたちに出会い、アルパイン・クライミングの明るい未来を感じることができた。

HISTORY EXPLORATION

北海道山岳のパイオニアでもあった 山岳修行僧円空

東海支部　清水克宏

北海道に42体の円空像が

美濃国生まれの江戸前期の山岳修行僧円空（寛永9〈1632〉年～元禄8〈1695〉年）は、生涯12万体とも言われる造像活動で知られますが、山岳修行でも卓越した存在でした。伊吹山をはじめ大峰山脈、日光連山、そして本会報4月号でもご紹介した、当時は空白地帯と言ってもいい飛騨山脈などで幅広く活躍しました。

いわゆる「円空仏」（実際には神像や神仏習合像も多数含まれますので、以下は「円空像」と言います）は、約5300体現存しています。その分布を見ると愛知県（約3200体）、岐阜県（約1700体）、埼玉県（約170体）に次いで4番目に多いのが、意外にも北海道で、道外からの移入像を除いても現時点で42体もの像が確認されています。

特に注目されるのは、そのうち10体の像の背銘（背中の銘文）に山岳名が記されていることで、山ヤとして関心をそそられるところです（表1、画像1参照）。それらの山岳と円空の関わりを探るため今夏3回、計14日かけ、当時「蝦夷」と呼ばれた北海道での円空の足取りを踏査してきましたので、以下にレポートします。

郵便局のある所、円空像あり

円空が蝦夷を訪れたのは、背銘に寛文6（1666）年の年号を持つ像が3体あることから、同年が中心だったことが分かっています。円空が蝦夷を訪れた理由については、民俗学者・五来重氏の「遊行のため」とする説が広く知られます。しかし、同氏が拠所（よりどころ）とされている遊行僧に関わる文献類は、18世紀初頭になり商人に交易を代行させる「場所請負制」に移行してからの時期のもので、円空が訪れた当時は、次のとおり遊行などできる状況にはありませんでした。

当時の蝦夷は、渡島半島の最南端に津軽海峡に面して和人の住む松前藩があったほかは、アイヌの住む蝦夷地として、上級家臣らが交易の拠点となる「商場」を年1回訪れる以外、和人の往来は厳しく制限され、地理的な把握はほとんどされていませんでした。幕府が諸藩に提出させた国絵図を基に作成した『正保日本図』（正保元〈1644〉年）を見ると、蝦夷地部分は極端に小さく、また、形状も実際とはかけ離れて描かれています（図1参照）。

しかも、松前藩の全60巻に及ぶ史料集『福山秘府』の「年歴部」などによると、寛永17（1640）年に有史以来鎮静化していた内浦山が大噴火して、山体崩壊に伴う山津波で700名に及ぶ犠牲者を出し、寛文3（1663）年には有珠山も有史以来の大噴火を起こすなど、蝦夷は大地動

表1：背銘に山岳名の記載された北海道の現存円空像一覧

No.	尊名	市町村	伝来寺社	円空背銘
1	観音菩薩坐像	茅部郡森町	内浦神社	刻「こんけん　うちうらのたけ山上」墨書「百年後有衍　本地観世音菩薩」
2	観音菩薩坐像	登別市	地獄谷展望台祠	焼損（菅江真澄記：有珠善光寺の仏三柱：のぼりへつゆのごんげん）
3	観音菩薩坐像	伊達市	洞爺湖中の島観音堂→有珠善光寺	刻「うすおく乃いん小嶋江州伊吹山平等岩僧内　寛文六年丙午七月廿八日始山登　圓空（花押）」
4	観音菩薩坐像	苫小牧市	錦岡樽前山神社	刻「たろまゑ乃たけ　圓」
5	観音菩薩坐像	釧路市	厳島神社	刻「くすり乃たけごんげん」
6	観音菩薩坐像	虻田郡豊浦町	小幌の窟屋	①菅江真澄『蝦夷廼手布利』によれば「いわうのたけごんげん」 ②松田仁三郎『北夷談』によれば「ゆうはりたけごんげん」
7	観音菩薩坐像	寿都郡寿都町	海神社	刻「いそや乃たけ 寛文六年丙午八月十一日初登内浦山　圓空（花押）」
8	観音菩薩坐像	寿都郡寿都町	海神社	刻「らいねん乃たけ」
9	観音菩薩坐像	山越郡八重町	山越諏訪神社	「ゆうらつふみたらし乃たけ」
10	観音菩薩坐像	松前郡松前町	三社神社	刻「しまこまき山上大権現」墨書「本地観世音菩薩」

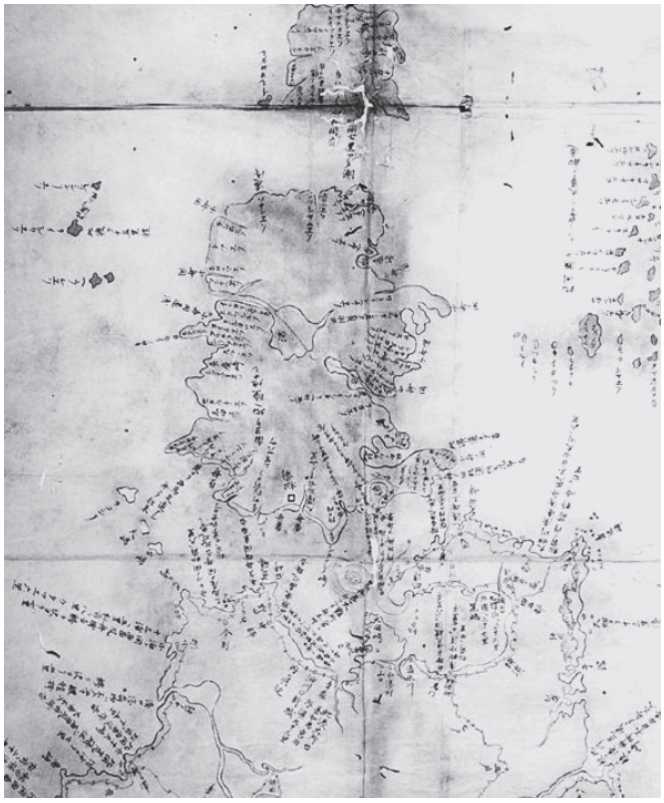


図1：『正保日本図』蝦夷部分／国立歴史民俗博物館蔵

乱の時代に入っています。さらに寛文5（1665）年春には、当時不吉の兆しとされた彗星が現われ、松前藩の日本海側の上ノ国太平山（大平山）が鳴動して天河（天の川）の河口部が陸になってしまい、「按、是皆不祥之兆也」と、さらなる災禍におののく状況にありました。

『福山秘府』の藩内の寺社を調査した「諸社年譜並境内堂社部」には、まさにこの寛文5年、日本海側の11ヶ所に新たに堂が建造され、これらを含む15の堂に「神体円空作」の像が置かれたことが記録されています。

今回、同資料に基づきMTBを使って旧松前藩の日本海沿いの全集落を巡りましたが、「郵便局のある集落に円空像あり」というほど、万遍なく円空像が置かれていることが確認できました。山岳修験僧円空は、山を鎮める祈りを込めて村々に神体像を造顕することを請われ、松前藩を訪れたのだと考えられます。その仲介に当たったのは、おそらく当時、松前藩のアイヌの交易品を一手に引き受けていた近江商人でしょう。

蝦夷地の冒険家だった円空

一方、円空が松前藩領を越え、アイヌの住む蝦夷地を訪れたことは、残された円空像とともに、菅江真澄の『蝦夷廼手布利』（寛政3〈1791〉年）、最上徳内の『東夷地道中日記』（同年）、松田伝十郎の『北夷談』（寛政11〈1799〉年）といった旅行家や探検家が、今では失われたり位置を変えてしまったりした円空像を見たという記録で知ることができます。それらの手掛かりから、円空が蝦夷地を訪れた主たる目的は、有珠山噴火で被害を被った有珠善光寺の再興であり、さらにその後、礼文華の小幌の窟屋などに籠り、蝦夷地の山岳名を記した像を造顕したことが分かります。

ここで気付くのは、それらの記録が全て寛政年間（1789～1801年）であることです。同時期は寛政元（1789）年、東蝦夷地（道東）で発生したアイヌ人の蜂起「クナシリメナシの戦い」の後、江戸幕府が蝦夷地を公議御料として和人の定住の制限を緩和したころです。さらにロシアとの外交問題も生じたことから蝦夷地への関心が高まり、旅行家や探検家、さらには伊能忠敬による寛政12（1800）年の蝦夷測量などによって、その地理的解明が一気に進む段階にありました。寛文から寛政は130年ほどの隔たりがあり、円空は寛政期の探検家たちに「再発見」された蝦夷地の冒険家と言うことができます。

背銘に記された山岳名

円空による山岳名が記された背銘のうち、「うすおく乃いん小嶋」（有珠山とその奥の院としての洞爺湖の小島）、「うちうらのたけ」（内浦岳：北海道駒ヶ岳）には、併せて「始山登」「初登」と記され、それぞれ大噴火を起こした活火山に初登攀したことが分かります。そして、これらの頂から見た山や、あるいはアイヌに聞いただろう蝦夷地の山の名が記された背銘のうち、「たろまゑ乃たけ」（樽前山）、「らいねん乃たけ」（雷電山）、「ゆうらつふみたらし乃たけ」（遊楽部岳）、そして、現在は所在不明の像にあった「しりべつ」（尻別岳：羊蹄山

の江戸時代の呼称）は、円空の背銘が当該山岳の文献初出と思われます。

今回、有珠山、内浦岳（信仰の中心となった砂原岳）を、円空初登攀当時の、火山灰が何mも積もった苛酷な状況を想像しながら登り、また、円空が「うすおく乃いん小嶋江州伊吹山平等岩僧内　寛文六年丙午七月廿八日　始山登　圓空」と背銘に刻んだ観音像などを造顕した豊浦町小幌の窟屋で、ヒグマの恐怖と闘いながら一夜を過ごしました。

このような体験を通じて、改めて北海道山岳のパイオニアとしての円空のすごさを実感した次第です。

画像1：円空作観音菩薩坐像　背銘「こんけん　うちうら乃たけ山上　百年後有衍　本地観世音菩薩」／権現山内浦神社蔵

【山岳会のヒトとモノ講座】

第1回「マナスル」開催のお知らせ

資料映像委員会

日本山岳会には、日本登山史にとって貴重な山岳資料が多数所蔵されています。しかし、これらの資料を紹介する機会が少なく、会内外にほとんど知られていないのが現状です。そこで、これらの資料（モノ）とそれにまつわる登山史を彩ってきた人物（ヒト）を紹介する連続講座を開催することになりました。

【山岳会のヒトとモノ講座】　第1回「マナスル」

◆日時：２０２４年１月31日㈬　18：30～20：30

◆場所：日本山岳会ルーム１０４号室およびリモートで開催

◆開催方法：１０４号室で対面の講演会を行ない、併せてリモート（Zoom）で配信する。

◆申込み方法：本会のホームページから申込み。後日、ＨＰにて詳細をお知らせします。

◆講師（ナビゲーター）：中島健郎氏（石井スポーツ所属、日本山岳会会員）・古野淳氏（前日本山岳会会長）

◆内容：１９５６年５月９日、日本山岳会隊の今西壽雄隊員とサーダーのギャルツェン・ノルブが、世界で初めてマナスルの登頂に成功しました。52年の踏査隊から始まって56年の第３次隊になって、やっと手にした初登頂でした。

このマナスル登頂は、敗戦から復興の途上にあった日本にとって大変明るいニュースとなり、その後の登山ブームの火付け役ともなりました。日本の登山界にとって画期的な出来事だったマナスル登頂を、山岳会で所蔵する資料（モノ）と当時の隊長や隊員たち（ヒト）の記録から振り返ります。また、最近のマナスルの様子についても併せて紹介します。

講師として、現代のヒマラヤ登山で活躍している中島健郎氏と、ヒマラヤ経験が豊富で、未踏ルートからエベレストに登頂されたこともある古野淳氏をお招きし、今昔のマナスルの世界へナビゲートしていただきます。

なお、**【山岳会のヒトとモノ講座】　第2回「エベレスト」**は３月４日㈪に開催。詳細は後日、本会のＨＰでお知らせします。

連載■文庫本でも楽しめる

山の名著再読

(7)『山と溪谷』（田部重治著・第一書房）

北島洋一

今日、『山と溪谷』と聞くと、誰しもその名の雑誌を思い浮かべるだろう。だが、今回紹介するのは、1929（昭和4）年に第一書房から出版された田部重治の本である。

田部重治は、1884（明治17）年に富山で生まれ、東京帝国大学英文科に入学。山歩きを始めたのは1908（明治41）年に卒業してからである。その年の秋に木暮理太郎と高尾山に登り、山頂から見えた雲取山へ縦走してみようと2人で話をしている。こうして、のちに日本山岳会第3代会長となった木暮との山歩きが始まったのだ。

昭和4（1929）年初版発行

田部重治の山の本は、最初に1919（大正8）年に北星堂から『日本アルプスと秩父巡禮』が出され、その後の10年間の山旅を加えたのが『山と溪谷』である。

田部重治には、ほかにも『峠と高原』『山に入る心』『忘れえぬ山旅』『我が山旅五十年』など多数の著作がある。そしてそれらには、同じ山行がそのままの文章で載せられているものもあれば、書き直されているものもある。『山と溪谷』の北アルプスであれば「槍ヶ岳より日本海まで」、秩父ならば、「笛吹川を遡る」と「金峰山から雁坂峠まで」、奥多摩では「数馬の一夜」などを読まれることをお勧めする。

北アルプスの縦走は1913（大正2）年に行なわれている。この縦走ではテントを持参したが、奥秩父などでは、麓で着茣蓙と呼ばれるワラで編んだ敷物を買い、それを雨具として使い、夜は地面に敷き、焚き火をたいて夜を過ごしている。もちろん寝袋などはない。

今のように快適に山で寝泊まりできたわけではなかろうが、それでも田部は「山を登ると云うことは、絶対に山に寝ることでなければならない。山から出たばかりの水を飲むことでなければならない」と『山と溪谷』の「山は如何に私に影響しつつあるか」で述べている。

「数馬の一夜」は、なかなかの名文である。八王子から歩いて五日市の先の本宿で泊まり、次の日に御前山に登った後、数馬の山崎屋という旅館に泊まったときのことが書かれている。鄙びた山間の静かな宿での一夜の情景が文章から浮かんでくる。田部が泊まった数馬の宿は今はもうないが、これを読んで泊まりに行った登山者もいると聞いている。

奥秩父の「笛吹川を遡る」では、木暮理太郎と画家の中村清太郎とともに、その上流を遡ったときのことが書かれている。西沢と別れて東沢を少し行くと深いトロと滝が行く手をさえぎるが、そのとき田部は渓谷の絶景に圧倒され、西沢渓谷の入り口にある石碑にも刻まれている名文が生まれたのだ。

1回目の遡行では、彼らは高巻きの道に気づかず、左手の崖を攀登り、木につかまりながら斜面を行き、「もう良いだろう」と降り立った所がちょうど「ホラノ貝」と呼ばれる滝の前であった。冷たい山の水を飲み、焚き火で暖をとりながら山に寝て、存分に大自然を味わっている。中村は、ここで油絵を描いている。このときの感動が大きかったことが文章から伺える。

余計なことかもしれないが、東沢の本当の美しさは、ホラノ貝より先にあることはお伝えしておきたい。逆層の大きな岩壁、一枚岩を細く流れる乙女の滝、釜の沢の魚留の滝から千畳のナメへと続く連続した滝の美しさ、両門の滝などに、私はホラノ貝以上の感動を得ている。

田部の文章があったからこそ私は東沢を訪れ、数馬の宿にあこがれた人もいるのだ。それは、名文の持つ力と言ってよいのではないだろうか。

文庫版は、岩波文庫（1993年初版発行、税込み814円）、ヤマケイ文庫（2011年初版発行、税込み1034円）で読むことができる。

（図書委員会委員）

(8)『ビヨンド・リスク』

（ニコラス・オコネル著／山と溪谷社）

森田栄二

世界の著名クライマー17人へのインタビューを基に、オムニバス構成の本書（手塚勲訳）は1996年に初版が刊行された。著者オコネルはシアトル在住のクライマーで、米国のクライミング誌にも寄稿するライターである。ヒラリーやメスナーなど著名人への取材は困難を極めたようで、原書にはアポや通訳など十数人の協力者への謝辞があり、偉大な先駆者たちの声を集めた貴重な労作である。

読者は、好きなクライマーの生の言葉に触れたいならどこから読んでも良いし、全体を通して読めば、20世紀後半の激動するアルピニズムとクライミングの世界の変遷を知るだろう。

それぞれの時代での論争も面白い。包囲法（極地法）かアルパイン・スタイルか。エベレストを制覇した当時のイギリス隊は（ドイツのヘルリッヒ・コッファー隊とは違い）、合理的で民主的な話し合いで成功した、とヒラリーやボニントンは述べる。ヒマラヤ鉄の時代を迎えてディレッティシマが志向された70年代に、日本隊が敗退したエベレスト南西壁を初登攀したダグ・スコットは、困難な南西壁登攀において、自分は少人数を好んだが英国隊の包囲法はシプトンら以来の経験があり有効に機能したとする一方で、組織に縛られ過ぎな国民性だ、と日本隊には少々手厳しい。

尖鋭的な高所登山はアルパイン・スタイルに移行したが、包囲法の方法論は公募隊など現代のヒマラヤ登山にも継承すると言えよう。また、無酸素か否かの議論でメスナーは、「エベレストでは皆に不可能だよ　脳が壊れると言われたが、たとえ成功しなくとも出来るだけ高い所までとチャレンジした」「酸素は皆が同じという訳ではなく自由だ」と述べている。

ヨセミテがフリー・クライミングの聖地となった時代、ボルトの使用を批判するR・ロビンズに対して、エル・キャピタンのノーズを初登したW・ハーディングは「現場に行かない奴は批判するが、その後もあの壁でボルトは増え続けた。自分のやることをやるだけだよ」と堂々と反論する。

5・14のグレードの垂壁を超えてクライマーは何を目指すのか。W・ギュリッヒは「クライミングが芸術だとすれば創造性こそが主要素だ」と主張する。ヨセミテのフリー・クライミングはその後、競技の発展やヒマラヤのビッグウォールへの挑戦を促して、平山ユージ氏や山野井泰史氏など多くの日本人もここを原点に活躍した。

女性クライマーも登場する。リン・ヒルは競技での成功に「女性には軽量で耐久力が大きい利点がある」と述べ、彼女のライバルで日本のファンも多かったデスティヴェルは、メディアが興味本位で自分を持ち上げるので競技が嫌になった、と愚痴る。

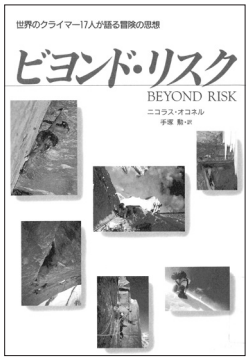
登山の人生哲学や宗教観の違いも興味深い。トランゴ・タワー東壁など高所登攀のパイオニアであるクルティカが、東洋哲学の道（タオ）にはまり、「クライミングとはある意味で宗教的な体験だ」と言えば、「なぜ危険な山に登るか」と問われてボナッティは、「神話のオデッセウスは世界の境界を超えようとしたが人間には限界を超えたい願いがあり、それが人間の条件だ」と語る。

まさにビヨンド・リスク。世界的クライマーが壮絶な困難に直面したとき、ある者は仲間を失いつつも、どのようにリスクへの思考と実践の錯誤を重ねてきたかを本書は読者に考えさせる。疑惑とされるローツェ南壁のトモ・チェセンも登場する、超絶的な一冊だ。

手塚氏の翻訳も忠実で、読みやすい。本書初版の前年には、長年クライマーに愛読された『岩と雪』が休刊して、エベレストではロブ・ホール公募隊など大量遭難事故も起きている。日本も世界も、時代はある意味で転換期を迎えていたことも、本書が読まれてきた理由の一つかも知れない。

文庫版は、ヤマケイ文庫（2018年初版発行、税込み1144円）で読むことができる。

（図書委員会委員）



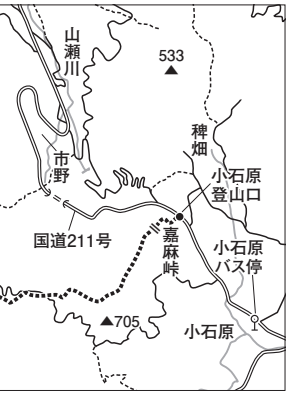
平成8（1996）初版発行

連載■ご当地アルプス登山案内47

嘉穂アルプス

北九州支部　高畠拓生

「嘉穂アルプス」は嘉麻市嘉穂地区の南部に位置する馬見山（978m）、屏山（927m）、古処山（859m）の総称である。馬見山にはブナが自生するブナ尾根や花崗岩の巨石群、ヤブツバキの群落などがあり、古処山には露出した石灰岩帯や特別天然記念物・ツゲの原始林、オオキツネノカミソリの群落なども見られる。絶滅が危惧されるクマタカの生息も確認され、貴重な生態系が形成されている自然豊かな山域として親しまれ、2016年に「日本山岳遺産」に認定されている。



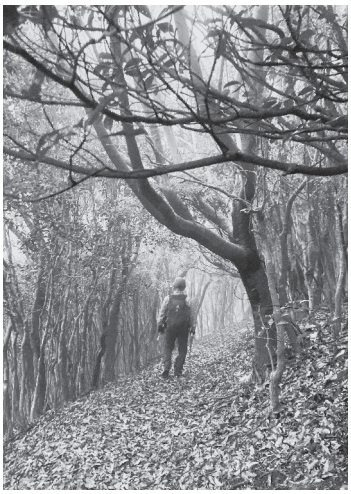
【コースガイド】

小石原バス停から国道211号を嘉麻市方向に1・8kmほど進むと「馬見山小石原登山口」という手作りの看板がある。スギ林の急な登山道を進むと尾根筋は自然林となり、登り下りを繰り返しながら穏やかな歩きやすい縦走路となる。林道を何度か横断するが、道標があり道迷いなく進める。明るい杉苔の丘を通り、なおも進むと展望岩に着く。さらに尾根に沿って進むと南東方向が大きく開け、英彦山と遠くに九重連山や阿蘇の山々、多良岳や雲仙の山々も望める馬見山見晴台に到着する。そこから50mほど西へ進むと一等三角点のある馬見山山頂に着く。頂上には木の温もりのある山小屋「避難小屋うまみ」があり、ひと休みして食事をとることもできる。

嘉穂地区側から見た嘉穂アルプス。左から馬見山、屏山、古処山

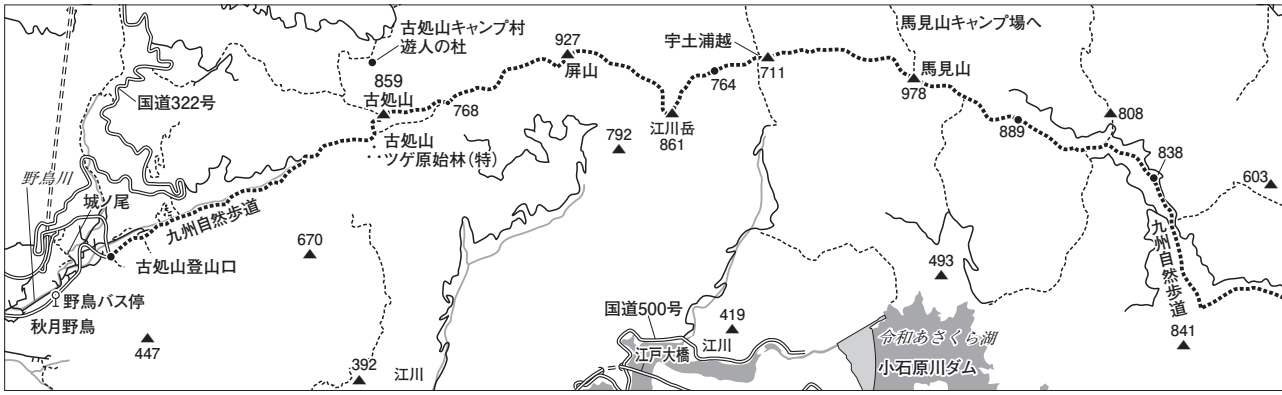
頂上からは西方向へ連なる主尾根に沿って進む。筑前茅城跡の道標を過ぎ、下っていくと宇土浦越の十字路に着く。宇土浦越からヤブツバキの木々に囲まれた木もれ陽の縦走路を西へ進む。3月ごろは、登山道がヤブツバキの花の赤い絨毯で敷き詰められる。さらに進むと右へ巻くルートがあるが、直進して急な階段を登ると江川岳のピークに着く。

鞍部まで下り、再び急な階段を登ると屏山の山頂に着く。山頂は北方向が開け、筑豊盆地とその先に福智山などが見える絶好の展望地である。鞍部まで、苔に覆われた石灰岩が露出した尾根を西へ下る。鞍部には分岐があり、北へ進むと奥の院・大将隠、南東に進むとツゲの原始林、西に進むと古処山山頂の道標がある。まっすぐ山頂に登るコースは露出した石灰岩の間を進む。今回は分岐を南東に下り、特別天然記念物に指定されているツゲの原始林のトンネルを進む。根回り1・6m、樹高12mを超えるものもある。原始林にはツゲを食草とする美しいニシキキンカメムシも生息し、豊かな自然を留めている。


心地良い縦走路を馬見山へ

水舟から石灰岩を避けながら登っていくと古処山の山頂に着く。山頂には白山権現が鎮座し、東に九重の山々、南に筑後平野、西にかけて耳納連山や雲仙の平成新山、北には飯塚盆地から福智山も望むことができる。山頂付近はオオキツネノカミソリの群生があり、7月末から8月初旬にかけては、山の斜面がオレンジ色に染まる。

古処山山頂からは水舟へ下って道標を南東に進み、渓流に沿って古処山登山口に下山する。登山道はしっかりしているが、ここ数年の水害の影響で分かりにくい箇所があるため、慎重に下山したい。



【コースタイム】 馬見山小石原登山口（1時間45分）杉苔の丘（30分）展望岩（30分）馬見山見晴台（3分）馬見山（15分）筑前茅城跡（15分）宇土浦越（30分）江川岳（30分）屏山（30分）ツゲ原生林（30分）古処山（15分）水舟（25分）牛厳（5分）古処山林道終点（40分）古処山登山口

【入・下山口へのアクセス】 小石原登山口は、ＪＲ日田英彦山線（添田駅からはＢＲＴ〈バス高速輸送システム〉に乗り換え）で大行司駅まで行き、そこから西鉄バスに乗り換えて小石原バス停で下車。登山口まで徒歩25分。または、ＪＲ福北ゆたか線・桂川駅から嘉麻市バスか西鉄バスに乗り換えて嘉麻市総合バスステーションまで行き、嘉麻市デマンド運行型バス（事前登録制、要予約。ただし平日、土曜日8時半～18時のみ）で嘉麻峠下車。登山口まで徒歩5分。

古処山登山口は、甘木鉄道・甘木駅から甘木観光バス秋月線に乗り換え野鳥バス停で下車。登山口まで徒歩20分。

【参考文献・地図】 嘉穂三山愛会提供資料。国土地理院2万5000分の1地形図「甘木」「小石原」。分県登山ガイド『福岡県の山』

連載■ご当地アルプス登山案内48

観海アルプス

熊本支部長　土井　理

「観海アルプス」は、長崎県・島原半島と熊本県・天草諸島で構成されている雲仙天草国立公園内にあり、特別地域に指定されている。天草地域は大小120もの島々を含む多島海で、沈降海岸特有の湾入、陸繋島や海食崖があり、海岸は変化に富み、穏やかな海面と荒々しい断崖が対照的だ。山々は天草上島の東海岸に位置し、標高の割には急峻で鋭い山頂が連なる稜線がすぐ海に迫る山容から「観海アルプス」と呼ばれている。

植物学者で農業博士の竹内亮が1931年に天草を訪れ、本会会報に登山報告を行っているが、このときには「観海アルプス」という言葉は出てこない。翌32年に天草を訪れた洋画家の龍清六が山上からの海景に感激し、国立公園への編入を説いたとされる。翌年、国立公園審議委員の田村剛博士を案内して登ると、スイス・アルプスを知る博士が大いに感激したとのこと。34年1月発行の吉見教英著『天草写真大観』の中の「天草観光要図」に「観海アルプス」の名が記載されている。

このアルプスの基盤岩類は肥後変成岩で、結晶質石灰岩・花崗閃緑岩・片麻岩・蛇紋岩などから成る。4月中旬～5月上旬には、保護活動が行われている、この地域特有のアマクサミツバツツジが花を付ける。また、白嶽自然公園で6月には絶滅危惧種のハッチョウトンボが現れるが、最近ではさらに減少傾向となっている。

【コースガイド】

観海アルプスは九州自然歩道の一部として、低山ながら天草上島の北から南に連なる。主な山名を列記すると、高舞登山（116m）、阿岳山（190m）、金比羅山（258m）、蕗岳（320m）、白嶽（372m）、矢岳（244m）、鹿見岳（284m）、最高峰の念珠岳（503m）、龍ヶ岳（469m）などが挙げられる。全長約23㎞、約9～12時間のロングトレイルで、1日で全コースを制覇するためには、高

舞登山登山口からの縦走か、逆方向の龍ヶ岳登山口からの縦走となる。

一般交通機関が少ないので、終点となる登山口で下山後のため交通手段を確保しておく必要がある。ほぼ中間に白嶽キャンプ場登山口があり、ここから登山開始すれば半分のコースを歩くことになり、時間の猶予がある。また、金比羅山と白嶽の間に牟田峠林道、白嶽と念珠岳の間に二弁当峠林道、龍ヶ岳直下の大作山林道と3本の林道が交差しており、エスケープ・ルートとしても使用できる。

それぞれの山頂は巨石や巨礫で形成されており、北部の見所としては高舞登山からの夕日で、「日本夕日百選」に選ばれている。また、矢岳・白嶽山腹に白嶽ドルメン（古代支石墓・祭祀場？）と言われる巨石群がある。白嶽キャンプ場は標高300m付近にあり、バンガローやテント場があるので、ここで宿泊して1泊2日の縦走を楽しむこともできる。

龍ヶ岳山頂から俯瞰した天草の島々。対岸は九州本土

南部は念珠岳や三ツ岩、龍ヶ岳など展望スポットが集中しており、八代海の多島美が楽しめ、九州本土も遠望できる。龍ヶ岳山頂には、車40台以上が駐車できる広い山頂駐車場があり、宿泊できるロッジやキャンプ場などが整備されている。

【コースタイム】 歩く速さによってコースタイムは変化するが、最大の時間で高舞登山（1時間30分）金比羅山（30分）牟田峠（1時間）蕗岳（1時間40分）白嶽（1時間40分）鹿見岳（30分）二弁当峠（2時間30分）念珠岳（1時間30分）大作山林道（45分）龍ヶ岳山頂程度となる。

【交通アクセス】 熊本市内から国道57号を天草方面に進み、天草観光の一つである天草五橋を順次通過。最終5番目の橋を渡ると天草上島に到着。天草上島の東海岸沿いに国道266号を進む。上天草市松島町阿村に「高舞登山登山口」の矢印看板があり、同名の産交バス停がある。矢印に沿って進むと高舞登山登山口で、車10台程度の駐車場と水洗トイレが完備されている。

続いて国道266号を海岸沿いに車で15分ほど南下すると、白嶽森林公園への案内板が現れる。案内どおりに進むと、白嶽森林公園とキャンプ場に到着する。

さらに高舞登山登山口から国道266号を海に沿って車で進むこと30分、上天草市龍ヶ岳町高戸に、産交バス「龍ヶ岳登山口」バス停がある。徒歩で龍ヶ岳山頂駐車場まで約1時間30分。国道266号から車で山頂駐車場までは、白浜団地からのルート（下貫線）、大道からのルート（大道線）、姫戸町二間戸からのルートがある。

一般交通機関としてのバスは、平日夕方2便、土・日曜昼1便しかなく、登山での使用は難しい。

【地図】 国土地理院2万5000分の1地形図「天草松島」「姫浦」「高戸」。「上天草トレッキングマップ」は上天草市HPより、「観海アルプス天草コース：熊本01」PDFマップは、九州自然歩道フォーラムHPより、「熊本ハイカーズマップ」は、環境省九州環境地方事務所・九州自然歩道ポータルサイトよりそれぞれダウンロード可能。

西北 東南

N

S

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。（紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度でお願いします）

〈続〉秋田市の太平山でヤマビル調査

小松芳美

秋田市の太平山でのヤマビル調査を、「会報」932号の本欄に掲載させていただいた。その後、数名の方からA「ヒルは木の上からも攻撃するのではないか？」、B「石灰はヒルの忌避剤として効果あるか？」との2つご意見をいただき、追加の調査を行なった。

A　木の上からも攻撃するか

3回にわたり調査したが、いずれもヒルは木から地面に降りた。3回目の調査では小低木の葉にヒルを移動させたが、約3分後に地面に移動した。

1回目調査

・日時　2023年7月14日㈮　8時30分ころ　気温24度C

・場所　ザブーンコース、オーパストップ看板付近

・検体　ヒル1匹

・実験項目　ヒルを木に移動させるとどうなる？

・結果　いくらか上がるが、すぐに下がり地面へ

2回目調査

・日時　23年7月27日㈭　11時ころ　気温26度C

・場所　ザブーン東側駐車場

・検体　ヒル1匹

・実験項目　ヒルを木に移動させるとどうなる？

・結果　すぐに下り地面へ

3回目調査

・日時　23年8月22日㈫　8時ころ　気温32度C

・場所　高岳山中腹（八郎潟町）

・検体　ヒル1匹

・実験項目　ヒルを小低木の葉（高さ50㎝）に載せるとどうなる？

・結果　約3分間で下の葉に移動後に50㎝下の葉に落ち地面に移動。

B　石灰にはヒルへの忌避効果があるか

以前、ザブーンコースの登山道に石灰様の粉末が撒かれたことがあったが、消石灰（農作業で使用するもの）にヒルがどのように反応するか確認した。

消石灰に直接触れた場合、および雨などで消石灰が溶けたものにヒルが触れた場合を想定し調査したところ、いずれもヒルへの忌避効果があることが確認できた。

・日時　23年8月9日㈬　13時～13時40分　気温度C

・場所　自宅駐車場

・検体　ヒル3匹（当日にザブーンコースで採取。採取時の気温28度C）

・実験項目　ヒルは消石灰を嫌うか？

①ヒルを消石灰の近くに置くとどうなるか――

ヒルに息を吹き掛け手前に誘導しようとするも、直近の消石灰の方向に進む。消石灰に触れた後、徐々に動きが悪くなり絶命。

廃道情報についてご協力を

国土地理院対応ＷＧ

日本山岳会ＨＰのトップページに「廃道情報」（会員限定）を2023年7月から開設しています。

日本山岳会は、従来から国土地理院の協力依頼を受けて地形図の情報提供を進めておりますが、会員の方から広く廃道などの情報を得るべく本ページを開設しました。

GPSアプリの普及により、国土地理院は「ヤマレコ」「ヤマップ」のGPS情報から得られるビッグデータを活用して地形図の修正を行なっています。

しかしながら、これらのデータは多くの登山者によるトラックデータ（ビッグデータ）を基に地形図の登山道を修正しているので、廃道やなんらかの要因で登山道が変化している部分は、登山者がほとんど通らないことからビッグデータに反映されません。消失した道を地形図に残しておくことは危険につながります。

そこで、会員の方々が登山中に、廃道とおぼしき道を見かけたら、確実でなくても結構ですので、情報を当ＷＧにお寄せください。寄せられた情報は、当ＷＧのメンバーが確認し、国土地理院に送ります。

詳しくはhttps://jac1.or.jp/kaiin/2022110723416.htmlをご覧ください。

ご協力よろしくお願いします。

問合せ：国土地理院対応ＷＧ　haido@jac1.or.jp

②ヒルを消石灰の液に入れるとどうなるか――
消石灰1gを水50ccに溶かし、ヒルを入れてみる。約2分間後に動かなくなった。
③ヒルを消石灰中に入れるとどうなるか――
自ら消石灰の中で動いたのち、約10秒で動かなくなる。消石灰から出し、水を掛けると少し動いたが間もなく動かなくなる。
○今回の調査は気温が38度Cという猛暑で行なったことから、消石灰の効果と猛暑の影響が定かでなく、気温が低くなってから再調査したい。

（秋田支部会員）

コーカサスのサクラ プロジェクト

吉川正幸

黒海とカスピ海の間には、500m級の高峰があるコーカサス山脈がそびえている。その北側はロシアだが、山脈の大半はジョージア（旧グルジア）という小国にある。ヨーロッパ・アルプスよりも高いだけあって、氷河を持つ険しくも美しい山がたくさんある。日本山岳会創立120周年記念事業として、コーカサスの麓の街、メスティアで2025年の春に、サクラの植樹を行なう予定だ。

それに合わせていくつかの旅行やトレッキングも企画するので、ぜひ、ご参加を検討していただけないだろうか。

きっかけは昨年、『山岳』2020年に私が書いた「半世紀ぶりの再訪記」を読まれた在ジョージア国日本大使から、世界遺産にもなっているメスティア市からコーカサスの無名峰に日本に因んだ名称を付けるという提案があるので、協力してほしい、との連絡があったことだった。

いろいろあったのだが、結局、メスティアに日本のサクラを植えようという計画を立てている。その主眼は、コーカサスの山を舞台に、日本とジョージアの交流を促進することにある。また、できれば、日本から険しい山に挑む登山隊を派遣したいと考えている。

ジョージア国の近隣で戦争が続いているのに、サクラの植樹かとの意見もあろうかと思う。しかし、ワシントンのポトマック河畔のすばらしいサクラ並木も、国際関係が悪化するなかで、日米の支援者が10年もかけて実現したという故事もある。ロシアと国境を接するコーカサスの麓に、平和を願い、最初の3本のサクラを植えようと考えた。

また、ジョージアを紹介するため2024年2月29日㈭の夕刻には、「在日ジョージア国大使による講演会とジョージア・ワインの試飲会」を開催する予定だ。詳細は日本山岳会のホームページでお知らせする。皆さまのご参加をお待ちしております。

活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です。

山行委員会――南八ヶ岳縦走報告

コロナ禍や台風で延び延びになって早4年。待ちに待った南八ヶ岳縦走が実現した。

初日は快晴。茅野駅に11名の参加者が集合。「これから全員で南八ヶ岳縦走を創り上げましょう！」という中原リーダーの挨拶にわくわく感が高まった。10時30分登山開始。歩き出して夏沢鉱泉を過ぎるとコケむした沢がなんともきれい。快調にオーレン小屋に到着すると昼食タイム。約30分休憩し出発。勾配がきつくなった坂

横岳山頂での参加メンバー

道を登ると北と南八ヶ岳の境・夏沢峠に到着した。

ここからの展望は青空＆紅葉の木々＆黒茶の山肌の見事なコントラスト！　しばらく樹林帯の登山道を進むと森林限界を抜けて雄大な景色が待っていた。大きなケルンなど、変化のある景色に疲れを癒されながらジグザグになったガレ場を登ること約1時間で硫黄岳に到着。平らで広々とした山頂からは名だたる峰々が見渡せ、正面にはデーンと赤岳が。北東側には大きな爆裂火口があり、垂直に切れ落ちた火口壁が迫力満点。15時硫黄岳山荘に到着した。夕食までの懇親会は自己紹介や山談義で話が盛り上がり一気に和気あいあいのムードに。夜は星も輝いた。

2日目は薄曇りで、柵に霧氷が張り付く6時過ぎに出発。数ヶ所の鎖やハシゴを慎重にやり過ごして約30分で横岳に到着。幻想的な富士山が見え感激。そこからも鎖やハシゴの連続。最高峰の赤岳頂上に10時到着。甲斐駒ヶ岳、北岳、間ノ岳などの雄姿に心が躍った。ここで文三郎尾根に下る3名と別れ、いよいよ縦走核心部のキレット越えだ。昼食場所のキレット小屋までは険しい岩場の下りで、不規則な岩や浮石があるガレ場の急下降や急斜面のトラバースが延々と続いて緊張の連続。小雨も降り出し、先の見えない登り返しが心身ともにきつい。

権現岳直下の源治ハシゴはほぼ垂直に立つ61段の長いもので、登ると不規則に揺れて落下しないように力が入った。やっとの思いで登り切ったが、しばらく腕がだるく息が弾んだ。小雨が小雪に変わり、青年小屋はまだか～の思いがいっそう強くなった。16時にようやく小屋に到着。疲労蓄積だが、やり遂げた感でいっぱい!!　夜は山岳医療パトロールの方々から貴重な話を聞く機会に恵まれ、有意義な時間が過ごせた。外は一晩中風雨で、室内も寒く着込んで寝た。

3日目は雨。編笠山をパスして下山することに。雨に輝く樹林帯が美しいコースだったが、石が滑り大きな水たまりも何ヶ所かあったので観音平登山口までの約2時間半は慎重に歩いた。下山後にパノラマの湯でさっぱりした後、小海線の小淵沢駅でなごりを惜しみながら解散。色々なことが凝縮された思い出多い山行だった。

細部にわたり配慮をしてくださったリーダーやサブリーダーの方

「海外登山助成対象登山計画」2023年度後期受付中

海外登山助成委員会

本会では登山界の活性化を目指し、優れた海外登山計画に対して「海外登山基金」による助成を行なっています。

困難を求めての挑戦、オリジナルな発想、斬新な切り口、独自のテーマのある計画など、ユニークな登山計画を支援したいと考えています。

会員資格やパーティ編成などの条件は問いません。ぜひご応募ください。

●対象
2024年2月1日～ 2024年7月31日に海外の山へ出発する登山隊

●申込み方法
1）所定の様式を本会HPからダウンロード、もしくは事務局に請求してください。
2）記入後、登山計画書と併せてメールもしくは郵送してください。
＊登山計画書には登山の目的、対象となる山の名前、標高、位置、行程、メンバーの基本情報（国内外の登山経歴含む）、予算計画など登山に必要な事項を網羅してください。
対象の山が未踏峰の場合、当該国政府発表の山名、標高を記入してください。

●申込み締切
2024年1月12日（消印有効）

●審査
2024年1月中に審査後、2月の理事会で助成の有無を決定します。

●報告と記録掲載
助成対象となった登山隊は下山後、報告書を提出してください。
会報「山」や機関誌『山岳』への記事執筆や、報告会へのご参加にもご協力ください。

●問合せ・申込み先
日本山岳会事務局　☎03-3261-4433　平日（10時～）、土（第1・3・5の10時～）
jac-room@jac.or.jp
件名「海外登山助成対象登山計画送付」
〒102-0081
東京都千代田区四番町5番4　サンビューハイツ四番町
日本山岳会 海外登山助成委員会宛

****
柏　澄子　KASHIWA Sumiko
e-mail BYY06320@nifty.com
https://linktr.ee/mt.sumiko

への感謝は尽きない。旧知の友のように楽しく語り合いながら歩いた参加者の皆さんとの出会いは、宝物である。全員で創り上げる山行の意味をしみじみ感じている。

山行委員会主催の山行に初めて参加して、世界が広がった感覚だった。また参加させていただきたいと思っている。

（東九州支部・木下恵子）

図書紹介

ユキヒョウ姉妹著
幻のユキヒョウ　双子姉妹の標高４０００ｍ冒険記

2023年4月
扶桑社
A5判　192ページ
1600円＋税

ユキヒョウは、世界で最も高い所に生息する大型ネコ科動物。雪山に適応して毛が長く、岩山でバランスをとるための長い尻尾が特徴で、ネコ科ならではの格好良さと愛らしさを併せ持つ。人が足を踏み入れるのも困難な地域に生息しているため「幻の動物」と言われ、絶滅の危機に瀕しているという。

本書はそんなユキヒョウに魅せられた、動物研究者の姉とコピーライターの妹という双子姉妹による、10年にわたるユキヒョウ保全活動の奮闘記である。

双子姉妹の姉こづえさんは、希少種の保全・繁殖生理学を専門とする研究者。一方、妹のさとみさんは広告代理店でコピーライター兼ＣＭプランナーの仕事に携わる。それぞれの職業と持ち味を活かして「まもろうＰＲＯＪＥＣＴ　ユキヒョウ」を立ち上げ、魅力発信と保全活動に取り組む。

全体はモンゴル編（第１章）、インド・ラダック編（第２章）、ネパール編（第３章）、キルギス編（第４章）と、フィールドワークを行なった国ごとに章立てられている。ユキヒョウの生息地はヒマラヤなど６０００ｍ級の山々が連なる高山地帯で、行くも帰るもひと苦労。高山病に苦しみ、ときに10時間以上の悪路を歩き、馬の背に揺られ、生息地では一日中糞や足跡を探して歩く。豊富な写真とともに、こづえさんの文章からは壮大なスケールの自然の中で行なわれる苛酷なフィールドワークの様子が伝わってくる。一方、さとみさんは研究者とは異なる視点から、生息地に暮らす人々の生活や文化の魅力を生き生きと伝える。

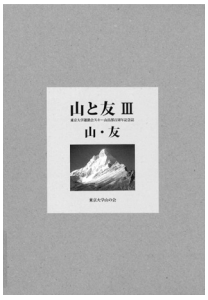
著者たちのユニークさは、知られざるユキヒョウの魅力を歌やとぼけた表情が可愛いキャラクター「ユキヒョウさん」で表現し発信したことだ。そして、ユキヒョウを通じて現地と動物園など様々な人々をつなぎ、保全活動の仕組みづくりを行なってきた。キルギスでは、現地の女性たちが特産品の羊毛で「ユキヒョウさん」グッズを製作し、日本の動物園で販売を行

なって研究・保全活動の支援を募る。売上金は現地保全団体に寄付し、生態調査や環境教育に役立てるプロジェクトを進める。

私たちの暮らし、動物園の動物、野生動物、生息地に住む人々の暮らし。「すべては同じ地球上で地続きに繋がっているということを多くの人々が知ることが、『まもる』ことに繋がっていく」と語る。ユキヒョウは日本全国9ヶ所の動物園で飼育されており（2023年3月時点）、身近に見ることができる。動物園を訪れた際には動物の魅力のみならず、その先に広がる世界を感じてみたい。

（井上優美）

百周年記念誌編集委員会・編
山と友Ⅲ　東大スキー山岳部百周年記念誌



2023年4月
東京大学山の会
A5判　472ページ
非売品

東京大学スキー山岳部の百周年記念誌『山と友Ⅲ』が出された。「Ⅲ」というからには「Ⅰ」と「Ⅱ」もあって、『山と友　東大山の会五十周年記念』が1981年、『輝けるときの記憶　山と友Ⅱ』が2000年に出版されている。ともに「友」へのこだわりが表題に表われているようだ。

記念誌は、100年という大きな区切りの中で出版されるものだが、その役割は小さくないと思われる。連綿と続いている伝統ある山岳部のなかで、一度立ち止まって過去を振り返り、歴史から学び、将来を展望するにはとてもいい機会であろう。

本書『山と友Ⅲ』は、第一巻の「山」と第二巻の「友」の2分冊の構成で箱入り。第一巻は山岳部の歴史を中心にまとめられ、第二巻は人にまつわる随想などで構成されている。当然、重複する部分もあるだろうが、二巻は肩のこらない読みものだ。こうした過去から未来まで見据えた記録を残すことで、次世代への提言、架け橋となることは間違いないだろう。

第一巻の第Ⅰ部は歴史を遡りながら8つの章を年代ごとに概観している。それぞれにその時代の出来事を簡潔に振り返りながら、間にスキー山岳部と日本・世界の山岳界の歴史を年表によってつないでいる。そして、第Ⅱ部の解説ページへ、概観した100年をテーマごとに掘り下げた記述が続く。第Ⅲ部は資料として、主要な海外遠征と遭難の記録である。

特に第Ⅱ部の解説ページは、東大スキー山岳部の特徴と直面している現状に焦点を当てたものが多く興味深い。さらにどこの山岳部でも抱えている部員減少と廃部の危機に関する記述も目を引くものだ。

南極観測は、大型プロジェクトに専門の研究者を多数派遣しており、その発端がマナスルの2次隊が登頂できず、ヒマラヤから南極へと目標転換した経緯が綴られている。未知の南極への探求心を満たすものだったという。

また、海外登山でも東大に岩登り熱が広がり、大学山岳部では珍しいクライミング志向の若手OBが育ち、その成果がシヴリン登頂やK7初登頂などの実績に結びついてきた。縦走や冬山登山を主な活動舞台としてきた山岳部には珍しく、クライミングやビッグウォールまで活動の幅を広げた時期だった。まさに1980年代、5章にある「輝けるとき」だった。

ただ、そこから6章の「登山形態の多様化」が進み、やがて変容期へ。高難度のフリークライミングやエクストリーム・スキーへの志向が強くなり、逆に活動の幅が狭まり部員同士の交流が少なくなっていったようだ。

その結果、大学山岳部の宿命とも言われる部員減少と廃部の危機に立ち向かわなくてはならなかった。社会全体に少子・高齢化の傾向が顕著になり、学生数の減少になかなか歯止めがかからない。現役部員ゼロの年もあり、山行のカリキュラムも立てられなくなったとか。かつて『山と溪谷』誌で、「がんばれ大学山岳部」という特集を組んだこともあったが、その記事でも有効な方策は見いだせなかった。そうした山岳部の危機的な状況から、再建策が講じられる。OBを中心に再建チームが組織されて、カリキュラムの見直しなど、新人勧誘に積極的に取り組み、なんとか部員の確保ができたという。

そこに、この百周年記念誌の第二巻「友」の存在が大きかったと思う。第Ⅰ部で「友との歩み」、第Ⅱ部で「友に寄せる」、第Ⅲ部で「未来

の友へ」。内容は、山と友とのつながりをテーマにした寄稿、随想、記録などだが、当然のことだが、一人一人に物語があって、それが「チーム登山」の良さに結びつく。「同じ釜の飯」を食った友は、生涯の友人となり、人生に欠かせない存在となる。やはり「山と友」の伝統の大切さを再認識させられた記念誌である。

（神長幹雄）

会務報告

令和5年度第9回（11月度）理事会議事録

日時　令和5年11月9日㈭　19時00分～21時00分

場所　集会室およびオンライン（Zoom）

【出席者】橋本会長、永田・桐生・飯田副会長、長島・南久松・平川各常務理事、松田・池田・望月・原田・川瀬・猿渡・久保田各理事、佐野・石川各監事

【オブザーバー】節田会報編集人

【審議事項】

1・支部行事への理事派遣依頼書について（桐生）（賛成14、反対0）

2・パートタイム職員規程の改定について（長島）（賛成14、反対0）

3・評議員懇談会の準備（進め方、資料などの確認）について（長島）（賛成14、反対0）

4・秩父宮記念山岳賞の審査結果の承認について（飯田）（賛成14、反対0）

【協議事項】

1・年次晩餐会の外注化について協議した（長島）

2・支部連絡会の議題（会報「山」の電子配信を試みた結果の反応と今後の方向性、入会金の減額など）について協議した（長島）

3・管理人室（居住スペース）の借り受けについて協議した（長島）

4・ルーム利用料金の徴収について協議した（長島）

【報告事項】

1・入会承認報告（橋本）

2・寄附金および助成金受入報告（南久松）

3・海外登山助成隊の現在までの成否結果（桐生）

4・首都圏活性化検討に向けての進捗状況（松田）

5・年次晩餐会の準備状況（長島）

6・JMSCAからのアジア山岳連盟集会への協力依頼について（長島）

7・若者向けの講演会および立食会について（永田）

8・YOUTH　CLUBの備品の取り扱いについて（平川）

9・自然保護全国集会報告（池田）

【その他】

1・会報「山」11月号の進行について（節田）

ルーム日誌　11月

1日　記念事業委員会（山岳古道調査）　山行委員会

2日　常務理事会　YOUTH CLUB委員会　山岳地理クラブ

6日　記念事業委員会（山岳古道調査）　平日クラブ

7日　総務委員会　スケッチクラブ

8日　財務委員会　休山会　山想倶楽部　かっぱの会

9日　理事会　九五会

10日　図書委員会

13日　総務委員会　アルパインスキークラブ

14日　フォトクラブ

15日　つくも会　三水会　マウンテンカルチャークラブ

16日　科学委員会　道のり山の会　山遊会

17日　自然保護委員会　120周年記念事業委員会

18日　資料映像委員会　緑爽会

20日　総務委員会　記念事業委員会（引き継がれる山岳祭）

21日　総務委員会　麗山会　バックカントリースキークラブ

22日　子どもと登山委員会

27日　総務委員会　記念事業委員会（引き継がれる山岳祭）

28日　総務委員会　00会

29日　総務委員会

30日　総務委員会　財務改善部会
11月来室者　362名

会員異動

物故

塚本珪一（4482）23・6・27
奥原教永（4711）23・5・11
塚本幸子（4957）23・8・12
池谷有爾（6242）22・10・31
浦　一美（9506）23・11・3
曲田　均（9536）23・11・3
中島達哉（10134）23・7・9
前田栄三（11766）23・11・14
志賀　傅（13273）23・8・31
松島岳生（14260）23・10・30

退会

峰尾勝美（8928）
深井幾蔵（13673）埼玉
安藤金栄（14489）秋田
西村　敦（15020）
西村朋子（15021）
大島わかな（15921）静岡
王　思　（16940）東海

INFORMATION
インフォメーション

◆四国八十八ヶ所歩き遍路
逆打ち①香川・愛媛

山行委員会

四国八十八ヶ所1200㎞を、春2回、秋2回の区切り打ち、1年で歩きます。2024年は閏年、逆打ちの年で順打ちの3倍のご利益があると言われています。4年に一度のチャンスです。初回は88番大窪寺から56番泰山寺まで。遍路・巡拝・服装などの作法は歩き遍路の経験豊富な四国八十八ヶ所霊場会の公認中先達2名がお教えします。遍路用品は88番札所での購入もできます。

日程　3月12日㈫～3月21日㈭
　　9泊10日
集合　3月12日㈫香川県88番大窪寺。集合10時　前泊し、12日高松駅＝志度駅→志度コミュニティバスで大窪寺
11日㈪夜行バスで高松あるいは高速志度からコミュニティバスもあります。
歩程　1日20～30㎞くらい（健脚向き）
参加費　1万円（通信費、写真代など）、1日1万円（宿泊代はそのつど精算、賽銭、納経、昼食代）、傷害保険は各自お掛けください。遍路用品は約2万円。別途往復交通費。
定員　8名（先着順）
申込み　3月1日㈮まで　数見（すみ）直（ただ）
☎090-7204-4668　✉sanko@jac.or.jp

◆企画展　大町と絶滅動物

大町山岳博物館

大町市や旧安曇郡に生息していた絶滅動物、現在絶滅の危機に瀕している動物を中心に、剥製などの実物資料を用いて解説します。

日時　11月3日㈮～2024年1月28日㈰　10時～16時、最終入館は15時30分まで
会場　大町山岳博物館　〒398-0002　長野県大町市大町8056-1　☎Fax 0261-22-0211

❖編集後記❖

●11月下旬は、関東4支部合同懇談会で栃木県の高原（たかはら）山を歩いてきました。最高峰の釈迦ヶ岳には数年前に登っているので、今回は八海山神社が鎮座する前衛峰までの〝お散歩〟。下山道がブナやミズナラなどの落ち葉で埋まっており、久しぶりに童心に還って（還るには少々無理がありましたが）、落ち葉のラッセルを楽しみました。

●ラッセルと言えば、大学山岳部時代の同級生に、やたらラッセルのうまい男がいました。雪の上をスイスイと泳ぐように進むので、付いたあだ名が「ヒラメ君」。ところが、彼は卒業して間もなく、あろうことか山ではなく伊豆・白浜海岸での海水浴中に水死してしまいました。「ヒラメ君」が海で溺れて亡くなるとは……。（節田重節）

日本山岳会会報　山　943号
2023年（令和5年）12月20日発行
発行所　公益社団法人日本山岳会
〒102－0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL　東京(03)3261-4433
FAX　東京(03)3261-4441
発行者　日本山岳会会長　橋本しをり
編集人　節田重節
E-メール：jac-kaiho@jac.or.jp
印　刷　株式会社　双陽社